

原字

Sukhāvati vyūha Sūtra

無量壽經

無量壽經  
は眞宗の  
基礎

安樂莊嚴經即ち無量壽經と名ける。之には舊い譯、新しい譯仰山譯があります。之は吾々の基礎として居る所の、經典であります。此の經典の講釋は、申上げる必要はございませぬけれども、一寸外に準じて申上げます。

この經は  
釋迦出世  
の本懐

聽者は普  
賢大士の  
徳に選ぶ

全體此の經は、釋迦佛が、此の世に現れて來た最大目的が、此の經を説くにあるが故に、之を説く前に、やはり法華經のやうに、特別の奇瑞を現はして説いて居ります。もう一つ此の經の特徴は、此の經の聽手が、おそろしいえらい先生です。先程の華嚴經の時の連中のやうな、迎もえらい先生である。それはどう云ふ方かと云ふと、皆んな普賢行を修して居る。「皆遵普賢大士之徳。」皆普賢大士の徳に遵つてゐるのです。此の普賢行の卒業濟みの方が、すらつとぐるりに聽きに來て居る。普賢行の卒業濟みと云ひますと、さつき言ひましたやうに、此の世でコソ／＼やつても、埒があかぬから、阿彌陀如來から資本を借らうかと云ふ連中でありませぬ。斯う云ふ手合ですから、大抵

阿彌陀如  
の本願の  
本末

の事は皆心得て居るものが、寄つて來た譯です。

さうしまして、其の御連中に對つて、釋迦佛が阿彌陀如來の本願の本末を説いた。それが四十八願である。其の願文が斯くの如く今日出來上つて居る。そこで御弟子の Ananda (阿難陀) が、「それはもう出來上つて居りますか。今構造中ですか。まだこれから出來るのですか。過去ですか。現在ですか。未來ですか。」斯う問うた。釋迦佛は、「十劫カレバの昔に出來上つて今現に西方にある。」と仰しやつてゐる。一切は四十億年とも、五十億年とも、五十六億七千萬年とも云つて居ります。中庸を取りまして、五十億年として、十劫は五百億萬年前のものだと云ふことです。これは餘り舊い事ぢやございませぬ。御經では極めて新しいことで、世間ではまあ十年前と云つたやうなものです。過去久遠無量不可思議兆載永劫の昔と云ふのがありますから、さう云ふものに比べたら、十劫は短いものである。天文學者は、光年で計算して居ります。非常に長い、人間離れしたことを言ひます。零の數を一々書いたら、紙が澤山要りますから、マイナス十の何乗とか、プラス十の何乗と云つて居りますが、極樂と云ふものゝ出來は、割

合新しいものらしいございます。さうして現に今存在して居る。而も其の中に居る所の人は、どう云ふ模様かと云ふことを、釋迦佛がずつと説いて、「斯様な状態である。」而したゞ言うて聞かせただけでは判らぬ。どうも見せてやらぬと満足せぬ。説明では可かぬから、活動寫眞を見せようと云ふことを考へて、それから釋迦如來が、光明を放つて、極樂を見せます。佛になると、えらい藝をやります。それを見せて曰く、「どうだ。私の言つたのと違うて居るか。」「全く今承つた通りの有様でございます。」

信疑の別

さうすると釋迦如來の相續人の、*Maitreya* を呼んで、「どうだ、蓮の中に華をかぶつて居るものと、出て居るものを見たか。」見ました。あれは全體どう違ひますか。「それは疑をもつて、彼の國に生れんと思ふものは、己の疑の爲めに、袋を被つた猫のやうな、恰好になつて居る。袋を被つて居らぬのは、斯様々々な譯である。」そう説いてあります。

信は佛教  
疑は其の基

何故さう云ふことを云はねばならぬか、何の爲めに袋の所まで、見せねばならぬか

と云ひますと、さき申上げました通り、信と云ふものが、總てのものゝ基礎になる。華嚴經の八十卷も、信を以て基礎にして居ります。總て佛教では、信を以て基礎にするのである。昨日申上げました如く、吾々は日本銀行の金の準備を調べてから、あの札を使ひませぬ。あの紙を信するものでありますから、百圓は百圓、十圓は十圓、一圓は一圓として通つて居ります。えらい人の言つた事を、信するより仕方がございませぬ。佛は無上正徧智と云つてあるのでありますから、其の何も彼も解つた人の言つた事を、信するより外に方法が無い。信が基礎になると、信に反對した疑つた者は、間違ひを起すと云ふことになつて来る。それをしつかりやつて置きませぬと、工合が悪いから、熊と檢疫所とめられて居るやうな恰好迄、マイトレイヤに見せたのであります。

それから此の一番終りにある文句が、逆もはげしい言葉でございます。今出して御覽に入れます。之は原本がありまして、私が翻譯しましたのを御覽に入れます。

ト云ヒテ無能勝ヨ、其ノ如來ニ於テ、爲サルベキコトハ、我ニヨリテモ成シ終レ

この經の  
終りの文句

釋迦如來の義徳達の行と彌勒の以下吾人の義務

リ、汝等ニヨリテ、今無疑ニヨリテ、修習ヲナスベキ義務アリ。

之は非常に力強い文でございます。原文の儘私が譯しましたのですから、間違ひはございません。 Kartavya 作すと云ふことを叮嚀に譯しますと、如來に於て作さるべき義務は、と譯した方がよい。 Tavya の語尾は、義務分詞でありまして、 Kar の下に使ひますと、 Kar 作すと云ふ字に就て、義務を感じて來ます。如來がせねばならぬ義務があるのです。釋迦如來が出て來た以上は、釋迦如來は、其の義務を果さなければならぬ。金を借りたら、返すべき義務がある。中には返さぬ不都合な者が居りますが、如來と云ふものは、義務を果さぬと云ふことは無い。如來の成すべき所の、義務と云ふものがある。其の次に、 Kritani tan mayā 我に於ても成し終れり、如來の義務を、私は今日なし終へた。「ト云ヒテ」と云ふのは、今迄安樂莊嚴經を説いて來た、それを一括したのであります。無能勝と云ふのは、 Ajita と云ふ字でございます。之はマイトレーヤ即ち彌勒菩薩の本名でございます。この字義は、戦に負けて居ると云ふことではございません。勝つ人はこれ以上に無いと云ふことです。私に勝つ者は誰も居ら

ぬと云ふよい字です。この方は、釋迦牟尼佛の相續人でございます。「其の如來に於て爲さるべきことは、我によりても成し終れり。釋迦牟尼佛も今日成し終つたのだ。これから後お前等、」 Jyestābhīr と云ふ複數が使つてある。汝ならマイトレーヤだけでよろしいが、汝等ですから、吾々皆引つかゝつて來る。マイトレーヤ、アジター一人の責任ぢやありません。無疑によりて、修習をなすべき義務あり。疑はずに此の法を、信する所の義務がある。如來も義務によりて説いた。聞く者も義務がある。聴く以上は疑はずに聴けといふ。其の後を續いて讀んで見ますと、ひどいことが言つてあります。

命 如來の勅

無着無碍ノ佛智ヲ疑フ勿レ、一切種々ノ寶ヲ以テ造ラレタル牢獄ニ、入ラシムルコト莫レ、誠ニ無能勝ヨ、佛ノ出生ニ遇ヒ難ク、法ノ教示ニ遇ヒ難ク、機會ノ遭遇モ獲難シ、又無能勝ヨ、我ニヨリテ、一切ノ善根彼ノ岸ニ、到達スルコトヲ説カレタリ、汝等ハ今修習シ成就セヨ、誠ニ無能勝ヨ、此ノ法門ノ大付囑ヲ爲ス、佛法ヲ滅没セシメザラムガ爲メニ努力スベシ、如來ノ勅命破壊スルコト勿レ。

佛教の大意

編輯の責

相續人にえらいひどい事を言つて居ります。無能勝よと云つて居りますから、吾々に此の責任は來ませぬ。吾々微力其の任に堪えませぬ。無疑に修習するだけは、吾々にでも出來ます。「佛法を亡滅せしめさらむが爲に努力すべし。」之は吾々仲間には一寸出來ませぬ。

出世本懷

斯う云ふ譯で、一子相傳見たやうな風に、三世諸佛、一佛々々出て來たら、其の次の相續人に渡す。之を十方一切世界に於て、やつて居る譯なんです。それで此の無量壽經のことを、佛の出世本懷の經と云ひます。娑婆世界に、釋迦牟尼佛の出て來た所の、之が一番の目的である。之が本當に自分の、抱懷して居つた所の、思想の發表だと云ふことになりすから、佛の出世本懷經であるは勿論、衆生の本懷經でもある。

一切諸佛  
說法義務

私共が三世十方一切諸佛の說法を、しなければならぬ義務のついて居る、義務經と云はなければならぬ。相續人の無能勝は、又それを引きついで、如來の法を滅没せさらむが爲に努力せよ。と書いてあるから、其の命令をマイトレーヤが受けた以上は、出世本懷だけでは濟まぬ。努力せねばならぬ義務がついて來る。如來の勅命を破壊する

こと勿れ。と來て居りますから、すつと一子相傳して居るところの、一切諸佛說法義務經と云つたらよろしい。

先づこれで十二經申上げました。まだありますけれども、地球が廻轉しますから、先づ此の十二經で終りと云ふことに致して置きます。

### 第十八 結 論

三部に結歸——釋迦一代說法の結歸は法華、涅槃、無量壽——法華經は原理——涅槃經は原理の説明——無量壽經は實行方法——原理よりも實行——無量壽經は凡夫往生の極致にして一切法の歸趨——敏速にたゞ彌陀の名號を聞信せよ

これから總結論を一寸と申上げます。

全體此の釋迦一代の說法で、代表的十二經を挙げましたが、それらは竟にどこに結歸するか、私は之は三部に結歸すると、始終言つて居ります。どう三部に結歸するか、

法 華

佛教の大意

三部に結歸

涅槃  
無量壽

釋迦一代の法  
結の法華  
涅槃無量壽

此の三經と云ふものが、釋迦一代の說法、あの無量無遍の大說法の、結歸する所である。私は斯くの如く信じて居ります。或は一經を以て、一切の終結する所と言つた祖師もあります。或は非常に多くの經を、擧げた人もあります。之は銘々の見方でございませぬから、必ずしもどつちがよい、どつちが悪いと云ふことは出来ませぬ。そんなことを論じたら、死ぬまで論じて、つきることはありません。銘々自分の見方によつて、決めるより外、道がありません。どれをつかまへても嘘はありません。みな廣略相入して居ります。

法華經は  
原理

私は釋迦一代の說法を、今申した様に見てゐます。何故斯くの如く見るか。此の法華經と云ふものは、さつき申しました通り、「一乘の妙典であつて、一乘經以外のものではない。ありとあらゆる者、悉く無上正徧智に至るのだ。一切衆生を擁護し、一切衆生を化益すること、觀世音菩薩と同じだ。」と斯う書いてある。洵に結構な話である

涅槃經は  
原理の說明

けれどもただこれだけでは抽象的説明で分らぬ。何故一切衆生が無上正徧智に至るか、その説明はしてございませぬ。妙法蓮華經は、其の立場が違ふから、原理を具體的に説明はする必要がないのである。

其の原則、デフイニションは、涅槃經四十卷の中に説明してあります。略あり廣あり、世諦あり第一義諦あり、或は佛滅後の誠めあり、大變高い所あり低い所あり、あらゆるものが四十卷に盡きて居る。總ての疑は、これで解けて參ります。どう云ふ難しい法門でも、之で知ることが出来ます。其の要領は、如來常住悉有佛性で、如來常住は無量壽のことです。有量壽ではいつか無くなつてしまふから常住ではない。一切衆生悉有佛性。この佛性は大信心であり、大信心は佛性なりと、涅槃經に書いてあります。信ずるとは何を信ずる、如來を信ずるのである。

無量壽經は  
實行方法

如來を信ずると云ふのは、所謂一念の淨信を發し、彼の國に往つて、不退轉に住することであると、無量壽經に書いてあります。それで三經の要領と云ふものは、皆んな同じことであつて、一つはデフイニション定理に立つもの、一つは其の原理を説明

したもの、一つはその實行方法を書いたものと見て宜しい。此の三經で一切經が大概解るのであります。

原理より  
も實行

原理の研究四十卷を、コツ／＼やつて居つては、間に合ひませぬから、手つ取り早く吾々は、無量壽經によつて、佛にならねばならぬ。サマタバドラ（普賢）のやうに、非常に賢い先生でも、結局向ふへ行つて、資本金を借ることを考へて居る。吾々手つ取り早く、向ふの國の資本金を借つて、一切衆生を化益するやうにせぬといけません。飯を食はねばならぬやうでは、一切衆生の濟度は出來ない。

無量壽經  
は凡夫往  
生極一致  
切に法歸  
切に法歸

そこでどうしても、一念の淨信を生じて、彼の國に生ずることを考へねばならぬ。凡夫にはこれより方法は無い。ありとあらゆる法も、これより外には無い。華嚴經八十卷は、普賢行願品を基礎とする。普賢行と云ふのは極樂に往生したものとすことであります。華嚴經八十卷は、つまり無量壽經の前座であり前文である。「皆遵普賢大士之德。」「得佛華嚴三昧宣暢演說一切經典。」「現前修習普賢之德。」と言つて、普賢行、華嚴三昧が極樂の基礎である以上、華嚴經は無量壽經の前文であるとして居ります。

敏速にた  
名彌陀の  
信せよ聞

何でも手つ取り早うやる工夫をしませぬと、愚圖々々やつて居つては、間に合ひませぬ。人間の身は得にくい、機會は得にくい、佛に遇ふことも難い。うか／＼すると死にます。又どこへうろ／＼行くか分りませぬ。めぐり遇うた時に、手つ取り早く引つ掴まへて、彌陀の名號を聞いて、之を信すると云ふことに、全力を集中しなければならぬ。私は斯く信じて居る。一切の者が斯くの如く信じて居る。我が宗祖見眞大師が信じたばかりで無い。もつとえらい人が信じて居る。一番えらいサマタバドラは八十卷の華嚴經を、背中に負うて、彼の國に往くことを考へて居る。一切法藏、遂に其處に落ち着いてゐる。佛教の大意は實にこれでございます。世諦因緣法、第一義諦等色々ありますが、私に無上正徧智が無いので本當は分りませぬ。今日が通らぬから、致し方なく、色々言ひますけれども、本當は何も分りは致しません。解つて居つたら誰が此の娑婆に、こんな馬鹿なことをして居りませう。彼の國へ往つて、もつと氣の利いたことをして居ります。こゝら邊をうろついて居るから、何とか言はぬと、其の日が送れぬから、くしやく／＼言つて居りますけれども、分り相な筈はありません。其

のうちに何とかして、向ふへ行つてやらうと思つて居ります。愈々向ふへ行く、汽車の切符を買ふことだけは、忘れぬやうにせねばならぬ。それが汝等無疑によりて、修習すべき義務である。佛の義務であると同時に、衆生の義務である。汽車の切符を買ふだけの義務はちやんと吾々有つて居る。

まづこれで佛教の大意を大體申上げました。今回はこの位でやめて置きます。

### 佛教の大意終

佛教の大意

定價貳圓

昭和五年七月十日印刷  
昭和五年七月十二日發行

述者 大谷光瑞

發行人 柱本瑞俊

東京市京橋區銀座西八丁目五番地

印刷者 渡邊安雄

東京市京橋區銀座西八丁目五番地

印刷所 民友社印刷所

東京市京橋區築地三丁目十六番地

大乘社東京支部

電話京橋四七二〇番  
振替口座東京二一番

發行所

版權  
所有

最新刊忽ち第三拾版  
大谷光瑞師著  
國民之自覺

著者は前著「帝國之前途」を以て經とし、新著「國民之自覺」を以て緯とし、八千萬の同胞悉く兩者を綜合併讀し、其の實踐躬行により、我國力の發展、國富の増進を期し、又一家の繁榮、生活の安定を得て、世界無比の皇恩に報せん事を希ふ赤心より本書を公にせり。冀くば諸賢の座右に一部を備へられんことを。

—(内容目次)—

- 一、我が民族の地位
- 二、所謂國難來と思想善導
- 三、食糧問題
- 四、衣服問題
- 五、住宅問題
- 六、生活の安定
- 七、節約
- 八、勤勉、能率増進
- 九、大資本と小資本
- 一〇、不景氣と其の原因
- 一一、修養と教育
- 一二、富に對する新舊の思想
- 一三、富の利用法
- 一四、謝恩の生活
- 一五、我邦の婦女
- 一六、産兒制限
- 一七、政黨
- 一八、結論

菊判百六十頁  
定價 六拾錢  
送料金六錢

第九十版  
天覽・大谷光瑞師著・覽台  
帝國之前途

卷頭序文著者眞筆版

の時難は刻々全國民の上に急迫し來れり。われ等は如何にしてこの難局を打開すべき乎。政治家よ、學者よ、實業家よ、すべて同胞よ、今は徒らに空論を闘すの時にあらず。實業家よ、すべて熱血を以て導きたり、實行者たる巨人大谷光瑞先生は、一代の先覺者たるを以て、大光明を指示す。國家の興隆、個人の指揮は、今明確の目前に在るを知らずや。

—(要目)—

- 一、我が帝國の地位(米、英、佛、伊、獨の地位と、帝國との比較)
- 二、我が國民の缺陷(勤勉なる外人、日本人の政治的盲目、對商上の不眞摯)
- 三、就職難(教育の欠、入學難、中學全廢論、供給生活者の危險、自活と家畜生活、都會集中)
- 四、思想の險惡(根本策、米價半減論、生活費低下)
- 五、生活安定に對する消極策(危險思想、奢侈、不安と不平)
- 六、生活安定に對する積極策(蠶桑問題、木材、自動車、ゴム、鐵、石油)
- 七、化學工業の問題(原料と國民性、電力問題)
- 八、水産業
- 九、現代青年の無氣力(原因、療法、青年の私奔)
- 一〇、歐米崇拜
- 一一、壯年の名と老年の財
- 一二、直接行動
- 一三、人口問題(移民の適不適、海外事情、無産渡航)
- 一四、我が外交論

菊判百六十頁  
定價 六拾錢  
送料金六錢



# 大谷光瑞師著

大乘社發行

## 版四 觀世音菩薩

四六版並製寫真版挿入  
定價 壹圓 送料 六錢

觀世音菩薩の御名は我々佛教徒にとつて欣仰すること久しきものである。然るに凡俗の徒はその來歴、由來を詳知するもの又稀である。甚しきは菩薩をして女人であるとなし、その説も亦區々、今此處に大谷光瑞師は大方の熱誠なる懇懇により、梵、英、漢、和の諸經を參照引例して本稿の述成る。師の科學的なる佛典解説は既に定評ある所、宜しく諸賢の御編讀を俟つ。

## 版十 見眞大師

菊判上製四百頁  
定價 參圓 送料 拾錢

本書は本社々長の一大論文にして、堂々十三萬言、直ちに大聖親鸞上人の本旨を宣説して遺憾なし。今や百世の群生皆自ら閉して長く不測の深淵に墮せんとす。是れ定に憐むべし。讀者能く本書に依りて大聖の眞面目を知り、併せて本願圓頓一乘の妙法に達するを得ん乎。

## 極樂莊嚴

四六判箱入天金 定價 貳圓  
總クローズ製 送料 八錢

親鸞上人の胸中燦たる光明に満ちた極樂の莊嚴は、もはや宗教、哲學、道德の世界に逐はれ、科學の世界はその光を奪ひ、時代はこれを罪らんとしてある、こゝに於て社長は科學は如來の世界に於て始めて保存するものなる事を宣し、現代人に甘露の法雨を樹いてある。眞摯なる讀者を俟つ。

## 版八 佛說阿彌陀經講話

四六判 定價 壹圓 送料 六錢

近代のわが佛敎聖典中最も普及されたのは此の阿彌陀經である。西方淨土の本願は正に此の經典より流出してある。本書は近代の佛學、大谷光瑞師の註釋本にして、その博學なる、その鄭重なる實に手をとつて親しく敎へるの感がある。苟くも阿彌陀經を稱ふる者の必ず手にすべき書である。

## 版四十 般若波羅密多心經講話

四六判 定價 七拾五錢 送料 四錢

世に般若波羅密多心經を講ぜしもの決して少なしとせず。而して本書が他に卓絶せる所以は、直ちに印度の原書に依憑し、社長が該博の蘊蓄を傾倒し、その梗要を平明に譯述せられたるにあり。蓋し本書に於ては一々の語源に就て文法上より解義せられたるものなりとす。

## 賜台覽 第一義諦

四六判 定價 壹圓貳拾錢 送料 六錢

絶對他力の平易簡明なる科學的解説は先人未踏の境地として眞に一世の大獅子吼、千歳不朽の名著なり。天下求法の士請ふ之に依りて悟道の彼岸に到達せんことを。

## 版十 佛教の原理

四六判クローズ裝美本 定價 貳圓 送料 特八錢  
並製 定價 壹圓五拾錢 並六錢

佛敎は今の人に解らないのではない。科學的の頭をもつた今の人々の方がよく解る。それに佛敎は何か現代人とは無關係のやうに考へて居るから此書が出て居るのである。この本を讀んで見れば、過去も現在も未來も誰一人として、また何一つとして没交渉であり得るもので無いといふことが判る。

# 佛教の要諦

送定菊 料價半 截 四七 拾紙 錢錢裝

内容 一、眞如 佛教は宗教に非らず——物質と精神——一切皆空  
二、實相 萬物悉く變化——智慧——因果——眞正の教理  
三、如來 三身——衆生——善惡——方便——大慈大悲  
四、經典 同質異性——正確簡單迅速の方法、其他

# 他力眞宗

送定菊 料價半 截 貳七 拾紙 錢錢裝

他力眞宗の本義を明にして、其の實相と、假相とを辨じ、成佛の方法を説いたもので、眞に社長の譽嘆に接するの思ひがある。是こそは無明の闇に迷へる人士をして、光明の世界に入らしむる良書。

# 無題録

第一編 第二編 菊半 第一、二編 各八拾錢 送料  
第三編 第四編 第三、四編 各八拾五錢 貳錢

巨人世に出興して、降魔の利剣を執り、亂麻の如き富面の非を悉く断ち盡さんとして居る。依つて、その胸るゝところ克く截らざること無き痛刀の快味に對して、鬼神は哭し、聖者は恭敬禮讃して居る。また、具眼の僧俗は、この斷片の小題を讀んで救はざる救ひの尊さを看破するも、群盲はこの獅子吼に値ふて、遂に響の如く啞の如くである。世の識者たるもの、速に、この縦横無盡に進り出づる智慧の泉を拘して、大いに樂しみ、大いに利せられん事を切望して止まぬ次第である。

# 濯足堂漫筆

上製四六判クロス美本箱入  
定價 貳圓  
送料 拾錢

内容 評陀▲四時常春▲山水▲天然と人▲遊春雜記▲宜昌峽に遊ぶ▲楊子江を下る▲江南春未來▲舟中漫言▲大風▲雲▲海▲花▲江南の春▲菜花▲落花▲秋色▲冬の花▲雨▲竹▲無憂園の記▲燈火▲香▲樂▲味▲蜂▲枕▲茶▲稻▲石炭▲讀書▲李翰林集を讀む▲韓非子を讀む▲湛然居士集を讀む▲諸葛武侯▲劍南詩稿を讀む▲杜甫と彌耳敦を讀む。

# 孫子新註

三六判上製函入  
定價 壹圓  
送料 四錢

孫子を支那の古き兵書のみと閉却するものあらば大なる誤である。其の本領は外交、經世の眞髓を説く。是れを有して國家榮え、是れを讀みて國民昂る。寔に政治、外交、商事、教育、日常處世上の活教訓書として價値高く、是れが活用によりて得るところ、厚く、深し。社長は深き智識を以て能く此書の眞精神を味讀し簡潔明快に心解せらる。蓋し人生處世の好指針、國家立策の寶典として、大方の必讀を俟つ。

# 對支橫議

四定價 六壹圓貳拾錢  
送料 六錢

支那政局の轉換の急なるは、恰も走馬燈の如く、窮りない。其の政局面を表裏縱横に解剖批判し、然も窮極する所は彼に非ずして我にあり、支那に非ずして日本に在る。附録『海外投資論』は農業、工業、商業に亘りて詳記せるもので、海外投資家必讀の活文字。

# 大谷光瑞師主宰

月刊  
雜誌

# 大乘

購讀料

一部四拾五錢 半年二圓六拾錢  
一年 五圓 (各送料共)

天馬空を行くやうに自在に大道を濶歩する者の聲を絶えず聞き続けやうとするには雑誌「大乘」の讀者となる事である。その社長たる大谷光瑞師を通して始めて吾人の耳に入る天來の聲はそれを纏めた著書でも讀める。しかし「大乘」によるやうに、月に又新にその警咳に觸れる譯には行かない。

竊に佛の深意を身に體して、世間の凡ゆるることの上に咀嚼して居る師である。佛典の解説はもとより時論隨筆に至るまで、眞を穿ち切實を極めて居る。眼の開いた現代人としては、折角のこの好伴侶の大聲を聽く特權を棄て、は同じ時代に生きた甲斐があるまい。

387

260

終

